

(発表題目) 設計した言葉は実際に使用に至るのか?—ウィトゲンシュタインの言語分析から見る概念倫理学の実装問題

(氏名と所属)

橋本 正吾、関西学院大学

(要旨本文)

近年になって議論が活発に行われるようになった哲学分野の中に、「概念工学 (Conceptual Engineering)」という新しいリサーチプログラムがある。その目標は簡潔に述べれば「われわれの生にとって、あるいは人類の生存にとって重要な諸概念を、よりよい社会の実現やよりよい個人の生き方に貢献することが可能となるように、設計ないし改定、つまりエンジニアリングすること」[1]である。なかでも概念倫理学は、倫理に関する語や概念の設計・改定だけでなく、それらの使用・応用を通じて世界の向上を目指す取り組みである。例えばサリー・ハスランガーは、ジェンダー・スタディーズの観点から「女性」や「民族」の概念の設計や改定を行い、「犯罪」概念の領域を改め、刑罰の対象を拡大しようとする試みに取り組んでいる[2]。

概念工学・概念倫理学に見られる語や概念の設計・改定の試みには複数の問題点が指摘されているが、当発表で取り上げたいのはいわゆる「実装問題」(implementation problem)である。それは、せつかく概念の工学によって設計・改定をした語や概念が、私たちの実際の言葉に「実装」できるのだろうか、言い換えれば、実際に使用に至るのかという問題である。この「実装問題」の解決の可能性が示されなければ、世界の状況を改善しようといくら概念の工学に努めたとしても、時間と労力の徒労に終始してしまう恐れがある。

当発表は上記の概念倫理学の目的やその実装問題を概観した上で、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの日常言語分析の観点から、概念倫理学の実装問題の問題点を検討するものである。その方法として、語や概念はただ単に新しく導入されただけでは日常言語の使用に至らないという主張およびその理由をウィトゲンシュタインのテキストから読み取ることとしたい。その際、彼の主著『哲学探究』のいわゆる「私的言語論」の第 257 節で述べられているように、単に語の名前を与えるという行為が成立するには、語の機能・役割や使い方を含め「言語の中ですでに多くのことが準備されていなければならない」という考えを出発点とする[3]。加えて、その準備されているべき「多くのこと」を考えるに当たって、他人が新しく設計・改定された語や概念を学習できるのかといった言語の学習可能性、ならびに、新しい語や概念をそもそも理解できるのかといった言語の理解可能性をウィトゲンシュタインの他のテキストから考察する。当発表では以上の考察をもとに、概念倫理学の実装を可能とするような準備されているべき条件や状況を模索したい。

[1] 戸田山和久・唐沢かおり編『〈概念工学〉宣言!—哲学×心理学による知のエンジニアリング』、名古屋大学出版会、2019年、p. i。

[2] Haslanger, S. 'Going On, Not in the Same Way', in: *Conceptual Engineering and Conceptual Ethics*, A. Burgess, H. Cappelen & D. Plunkett (eds.), Oxford: Oxford University Press, pp. 230-260, 2020.

[3] ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン『哲学探究』、鬼界彰夫訳、講談社、2020年、§ 257。